



TITLE:

1975年度物性若手「夏の学校」開催後記

AUTHOR(S):

CITATION:

1975年度物性若手「夏の学校」開催後記. 物性研究 1975, 25(1): 17-18

ISSUE DATE:

1975-10-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/89072>

RIGHT:

1975年度物性若手「夏の学校」

開催後記

物性若手グループ大阪大学支部

75年度物性若手グループ「夏の学校」は7月27日より8月2日迄、長野県野沢温泉村にて開催されたが、約400人の受講者と46人の講師が参加し、盛会であったと云えよう。当支部では、本年度夏の学校準備局として、企画運営にあたってきたが、ここに誌面を借りて、開催に御協力頂いた各方面に感謝の意を表すると共に、準備局報告を行ないたいと思う。

「夏の学校」は全体講義とサブゼミを二本の柱としている。この内、サブゼミは若手グループのメンバーにより任意に構成されたサブグループの自主的な活動がその主旨である。準備局ではこれに対し可能な限りの便宜を計るが、その企画運営にタッチする事はない。サブグループの活動については、別に物性若手グループ事務局より報告がなされる予定であり、ここでは全体講義を中心に、今年度開催にあたっての基本方針、企画、経過と総括、及び全体講義座長による講義内容の簡単な紹介を行なう。

「夏の学校」は物性研究に従事するか、或いは従事しようとしている、全ての若手研究者を対象に、その研究の発展を目的として開かれる。この観点から、従来行なわれて来た全体講義に多少の批判を加えるならば、その内容が、既に確立されたもの、論文ないしは教科書を読む事によって十分身につけ得るもの、の単なる紹介と化した場合も多かった様に思える。全体講義は新鮮な内容をテーマに受講者自身が積極的に参加し、一つの研究過程を吸収していく場としてとらえられねばならない。

その為の一つの可能性には過ぎないが、試みとして、全体講義に於いて講義とディスカッションを一体のものとし、講師と受講者との対話を重視し、次に述べる形態を採用した。

①一つのテーマについて担当講師による講義を三時間程度とし、②その内容は、講師自身が最も興味深く感じているテーマ、目下進行中の研究或いは疑問に思っている事等、例え未整理の状態でも物理的イメージが明確に提示されるものであり、③更に、講義

終了後、受講者の考えを述べると共に受講者自身のアイデア形式をうながす場として、ディスカッションの時間を設ける。④又、例年作製配布されるテキストについては、むしろ予稿集の形とし、講義内容の理解に必要と判断される知識の紹介及び参考文献のリストを講師に執筆依頼し、これを編集する。

以上の方針に基づき、最終的には32名の方に全体講義講師の担当を御願いした。テーマについては全て講師におまかせしたが、物性の中心的分野のみならず、生物物理から素粒子に迄わたるものである。各講師には午前中三時間程度の講義及び午後二時間のディスカッションを担当して頂き、一日五～六コの講義を並行して行なった。又、各講義には座長を設けスムーズな進行を計った。

具体的なプログラムについては、内容紹介を参照されたい。

文責 阪大理 赤井久純